

「あなたは、救い主です。」要約

マルコ福音書 14章46－52節

森島 牧人 牧師

聖書を読んでいると、どうしてこんな記事が聖書にあるのかなと思うことが時々あります。もちろんそこには聖書としての意図があり、記者の思いがあると思われませんが、今日の聖書の、主イエスの逮捕の場面を記した中にも、そのような記述があります。

聖書は、「人々は、イエスに手をかけて捕らえた。居合わせた人々のうちのある者が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした。」(マルコ14:46・47)と始まります。ヨハネ福音書には、この剣を抜いたのはペトロとありますが、マルコ福音書では誰であるか明らかにせず、「居合わせた人」としか書いてありません。

「居合わせた人」とは、主イエスの御旨を知らない<第三者>ということで、主が救いの御業を成就されるその時、弟子たちは何も出来ず、ただ主の傍らに立っただけだったということを語っています。そしてこの時の弟子たち同様、今の私たちも「居合わせた人」としての存在に過ぎないのかも知れません。つまり私たちは、弟子の一人として置いてくださっている主イエスの恵みに感謝しつつ、主の御業に協働し励む者でなければ、信徒としての私たちの働きとは、ここに出てくる手下の一人を傷つけた者ぐらいでしかないことになりましょう。

マタイ福音書には、この時主イエスは「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」(26:52)と言われたとあります。つまり、ここで私たちは、私たちの判断から来る行為がどれほど神の求めるものと違っているかを、教えられるのです。

さて、主イエスを見捨てて逃げ去った弟子たちは……。このままでは彼らは主に対して全く<行きずりの人>でしかなかったのですが……。しかし、彼らの努力ではなく、父なる神が真実であられたこと、そして偏に主イエスが弟子たちをお見捨てにならなかったことによって、そうはなりません。つまり<信仰>とは、私たちが自覚的に持ち続けられるものではなく、主が私たちを捉えていてくださることによってのみ、持続するものであることが分かるのです。

続いて主イエスは自分を捕えようとする人々に「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕えに来たのか。」(マルコ14:48)と言われます。群衆を恐れて夜の暗がりを持ちとする人々は、必要以上に武装をして、悪が支配している闇の中で無力な主を捕らえ、十字架に付けるために引き立てて行ったのです。しかしこの場面は、夜の暗さの中にあっても神の御旨は果たされていたということ、すなわち人間の弱さ醜さという闇の中にあっても、神の御旨は果たされているということ、明らかにしている場面です。

そして問題の記事、「一人の若者が、素肌に亜麻布をまとってイエスについて来ていた。人々が捕えようとすると、亜麻布を捨てて裸で逃げってしまった。」(同14:51・52)は、この後にわざわざ段落を変えて記されています。この若者については様々な憶測がありますが、この若者が誰であれ、この記事には、この時弟子たちを襲った恐怖がどれほど大きかったか、そして彼らがいかに素早く逃げ去ったかを雄弁に語っています。そしてそれを目撃して書いたのはこの福音書の筆者マルコですが、しかし実は彼は弟子たちの不甲斐なさを書きながらも、実は同時にそれが自分自身のことでもあったことをここに記したのではないかと思われるのです。つまり追手の者が彼の着ていた亜麻布に手をかけた瞬間、若者(マルコ)の勇気や決意は忽ち消え去り、彼は「裸」という無様な姿で逃げ出したのです。この<裸>は恥を表すもので、この時マルコだけではなく弟子たちのすべてが、恥まみれの状態だったのです。

しかしながら、この記事から読み取れることは、それだけではありません。この後、彼らは復活の主イエスと出会い、その贖いの故に、恥まみれの無様な者も神の祝福を受けることを許されているという、自分たちの光栄を知らされることになるのです。つまり本当に救われて真の勇気を与えられたその時、彼らの中に生まれたのは悔い改めの思いであり、無様な自分たちをも顧みてくださった主なる神に栄光を帰するためには、どうしてもあの時の恥ずべき姿を曝け出さない訳には行かないとの、思いだったのでないでしょうか。

そして、マルコが自分や弟子たちの醜態をここにわざわざ語り記したことのさらなる思いには、主御自身が無様な私たちが父なる神に心からの悔い改めをし、感謝と喜びを持って主の御業に協働し励むことを、求められておられるとの、この一事を私たちに伝えようとしてのものだったと思われるのです。

(説教要約 羽入田悦子)